御茶壺道中 その十

内藤恭義

御茶壺宇治到着

河川が氾濫して川止めにでもならない限り、江戸を発ってから十二日で宇治到着となります。

途中、大津で宇治茶師の代表者達に出迎えられ、宇治近くの最後の継立場となる六地蔵（地名）の駅で旅装をとき、平服に着がえて、いよいよ宇治入りです。村境いの宇治橋では、十徳という衣裳を着用した茶師一同の迎えを受けます。

宇治橋をはじめ宇治郷の主な辻には『御物御壺出行無之内新茶不可出』と記した高札が立てられており、宇治郷の全ての家々は、手桶に水を充たして火災に備え、家の内外を清掃して将軍家の茶壺の到着を待ったといいます。

到着するとすぐに、採茶使はその年の当番の御茶頭取の邸に入り、挨拶を交すと、直ちに茶詰めの段取りについて確認の話し合いを行いました。

茶壺は集落から離れた御茶壺蔵に納められ、不寝番により厳重に警護されました。

採茶師は宇治に約半月間滞在します。その間の主役は宇治御用御茶師と、派遣された茶道衆（数寄屋衆ともいう）です。

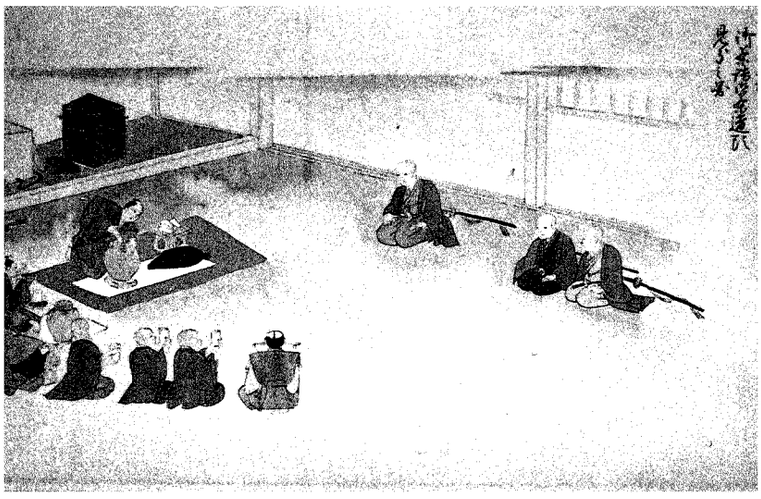
製品吟味など様々な手順を経て茶詰めに入るのは到着後の五日目くらいで、二日かけて行われました。

精選された良質の濃茶は美濃紙の袋に十匁ずつ入れられ、壺の中央部に置き、周りには薄茶として使う葉茶を詰めて壺口を封じます。封印された壺は鍵のついた外箱に入れられ、銘柄、量目、月日、製茶師名を記した御茶入日記が蓋裏に貼られ、直ちに御茶壺蔵に保管され荷造りを待ちました。

茶詰めが終った翌日には、将軍家から朝廷への献上茶が京都所司代に運ばれ、京都所司代を通して朝廷へ献上となりました。

茶詰めが完了して六日目ごろ、茶壺蔵で徒士衆の立合いのもとに荷造りが行われます。今度は茶が入っていますから渋紙、ゴ座などで防湿に配慮した荷造りです。これを「壺箇り」といいます。

荷造りが完了すると、翌日、宇治橋ぎわで茶師の見送りを受けながら、再び御茶壺道中のはじまりです。



宇治御茶壺之巻の内　御茶結茶道頭見分の図
（国会図書館蔵）

写真説明
茶詰めは、頭取をつとめる上林家で行われます。茶師達が控える中で採茶便の人達が吟味している様子が判ります。体の大きさとの比較から壺の大きさや茶壺を入れる箱の大きさなども判ります。

都留市文化祭受賞者

小学生詩入賞者
文化祭賞
付属小二年　かまた　あずみ
入選
付属小一年　みうら　あんな
おまた　えい
すずき　えみ
なかの　はるな
東桂小六年　佐藤絵美
池田紘子
藤本依里
志村幸子
谷一小三年　大野かおる

小学生俳句入賞者
文化祭賞
付属小六年　高部睦未
入選
付属小六年　渡辺淳一
東桂小五年　天野美奈絵
六年　小林真理
長田貴子
志村祐輔
谷一小五年　瀧本美佐子
六年　志村圭亮
幡野味由季
庄司麻衣子

小学生短歌入賞者
文化祭賞
谷一小五年　内藤あさみ
入選
谷一小六年　大谷睦美
付属小六年　郷田裕昭

中学生俳句入賞者
文化祭賞
東桂中三年　梅谷正美
入選
東桂中三年　渡辺由乃
近藤大輔
二年　三枝いずみ
小野寺真弓
熊谷涼子
志村統
一年　杉本美紀
小林慎治
渡辺尚美

中学生短歌入賞者
文化祭賞
東桂中三年　深沢賢至
入選
東桂中二年　中込みゆき
滝口浴
長田裕子
矢野雅美

一般の部入賞者
文化祭賞
さつき盆栽の部　勝俣房三
趣味の部　宮井昭三
短歌の部　雨宮たけの
俳句の部　国井美代子
入選
俳句の部　益子甲村子
市川和男
詩の部　渡辺好真
志村まさ江

文化功労者
茶道部門　渡辺地子
短歌部門　石井幸代
舞踊部門　関戸富次